

## 中国風刺歌謡研究序説

——岡益巳著『現代中国と流行り謡』に寄せて

班 瑋

(山陽学園大学専任講師)

### はじめに

「共産党の政策はお月様のよう、一日と十五日じゃ形が違う」。この十年ほどの間、風刺歌謡が中国の巷間に密かに流行っている。「人民は党について行く、党は鄧小平について行く、鄧小平は気の向くままに歩く」。為政者は気紛れなので、庶民も乱世を生き抜くために知恵を絞る。曰く、「上には政策があれば、下には対策がある」。やはり「お上」に対する不信任感は根強いものだ。

八九年の天安門事件に象徴されるように、改革・開放政策の進展につれて、中国社会ではインフレの激化、失業の増大、官僚腐敗の蔓延、貧富の格差の拡大、犯罪の急増などの社会的矛盾が顕在化してきた。世紀末の混乱に不安、不満を抱く人々は、数多くの風刺歌謡を創作、流布して鬱憤を晴らすわけである。岡益巳氏のこの新作は中国民衆の怨嗟の声を伝えており、ポスト鄧小平の中国の行方を憂える者にとっては一読の価値がある。

### 一、民謡の源流

中国語では、厳密に言えば、「歌謡」は「民歌」と「民謡」の合成語で、「民謡」と「民歌」は異なる意味をもつ用語である。前者は、昔は「童謡」、現在では「順口溜」とも呼ばれている。つまり曲調を付けておらず、主に世

相風刺を内容とする韻文の一種である。それに対して、後者は音楽を伴って歌うもので、内容的に男女の恋や日常生活を反映するものが多く、日本語で言う「民謡」に相当する。『詩経・魏風・園有桃』の中には、「心之憂矣，我歌且謡」（「心の憂い，我は歌い且つ謡わん」）の句があり、「毛伝」の解釈によれば、「曲合楽曰歌，徒歌曰謡」（「楽器に合わせて歌うのを歌と言い，伴奏なしで歌うのを謡と言う」）。両者の共通点としては、いずれも作者不明で、庶民の気持ちを率直に伝えたことにより、大変人気を呼んでいるということであろう。

中国民謡の起源は太古に遡ることができる。『古詩源』に収録されている無名氏の「擊壤歌」は、上古時代の民謡の代表作と伝えられている（後人の偽作仮託という説もある）。

日出而作，日入而息。鑿井而飲，  
耕田而食。帝力於我何有哉。

日が出ると外に出て働き，日が沈むと家に帰って休息する。井戸を掘って飲み，畑を耕して飯を食う毎日があるだけなのだから，天子の力など俺たちには全く関係がない。

古の聖天子とされる堯の時代，ある老人が腹鼓を打ち，地をたたきながら歌ったというもの。生活が安定し，天下太平を謳歌する民衆の心が素朴に歌われている。言い換えれば，民が政治を意識せずに日常生活を営むのが理想的な政治のあり方だとされた。

ところが，「無為自然の道」がいくら美化されても，所詮おとぎ話の世界であり，「苛政は虎よりも猛なり」のが，世の常である。君主が重税を課して人民を苦しめる酷い政治を行った時には，それに対する反発として人民の恨み声が跳ね返ってくる。『書経・湯誓』の中には，夏朝の暴君桀を罵る歌謡が記録されている。

時日曷喪？予及汝偕亡。

自ら「東方の日」と誇示する桀に対して，民衆は「この太陽さえも何時か亡

びるのであろうか。わしもお前も皆亡びてしまえ」と嘆き、身を殺してまで桀の滅亡を激しく願っていた次第である。『詩経・国風』の中には、こうした内容の作品が数多く収められており、「魏風・碩鼠」はその傑作と言えよう。

碩鼠碩鼠，無食我黍。三歲貫女，莫我肯顧。

逝將去女，適彼樂土。樂土樂土，爰得我所。

大きな鼠よ、私の作った黍を食べるな。三年間お前を養ってあげてきたのに、ちっとも目をかけてくれなんだ。さあお前のもとを去り、憂いのない地へ行こう。憂いのない地があったなら、安らぎの場としたものだ。

「碩鼠」とは大きな鼠の意で、年貢を取り立てる領主の隠喩とすると、この歌は通説のように、農民が悪政から逃れ安楽な土地を求めようとすると解されよう。

「物極まれば則ち返る」。搾取がひど過ぎると、民衆が反乱を起こす。そうなれば国は必ず滅亡する。「怨讎 四海に溢ちて、神明 其の禍辟を降すなり」（『後漢書・張衡伝』）と言われたように、人々の怨みが国中に満ちあふれると、天の神までが、其の怨みの原因を作った為政者に天罰を下す、と昔の人は信じていた。『礼記・王制篇』によれば、周朝の時代から、朝廷が民間から歌謡を搜し集め、施政の参考とするために、数多くの采詩官を全国へ派遣した。『漢書・藝文志』に「古、采詩の官有り。王者の風俗を觀て得失を知り、自ら考正する所以なり。孔子純（もっぱ）ら周詩を取り、上は殷を採り、下は魯を取る。凡そ三百篇なり」とある。これはすなわち『詩経』の起源である。有識者も「天の視るは我が民の視るに自い、天の聴くは我が民の聴くに自う」（『書経・泰誓』）などの古訓を用いて為政者を諫める。常に民の歌声に耳を傾け、施政の得失に注意を怠ることがないのは、「仁政」を施して民心を収攬することを図る「明君」の基本とされてきたのである。

春秋戦国時代において、各国の諸侯は競って「採風」を行なった。前漢の武帝の時、音楽をつかさどる役所「樂府」が設置され、そこでは民間の歌辭を

採集して楽に入れたりすることをした。その成果はすなわち「楽府詩」である。楽府詩が詩歌文学の精華である唐詩の土台をなしてきたことは、すでに周知の通りである。以後、官庁は名称を変えつつ、断続して南北朝の末まで約700年に及んだ。ただし、後期の楽府詩の内容は、すでに御用文人による皇帝礼賛のようなものに変質したことを見逃してはならない。清朝末期、民謡は異民族支配を批判し、権力者を誹謗するものとして禁じられたが、「民の口を防ぐは、川を防ぐより甚だし」(『国語・周語上』)ということで、箝口政策は効果どころか、風刺歌謡は依然として全国を風靡していった。そして、まもなく清王朝も滅びた。

社会混乱期になると、民謡は更に堰を切った水のように、広大な地域で無数の庶民の口から歌い出され、流れ伝えられていく。そのような時に、反乱を企む野心家が意図的に流した謠言は、純粹の民謡とは大いに趣を異にしている。後漢末に起こった「黄巾の乱」は、その良い例である。当時、王朝の腐敗と天災飢饉が重なって民の疲弊は甚だしく、流民が激増した情勢には、改朝換代の兆が明らかになってきた。民衆宗教の教祖である張角は太平道を唱えて民心をつかみ、十年の間に数十万の信徒を増やして武装蜂起を準備した。彼ら信徒はみな頭に黄色の巾を付け、以下のような流言を散布していた。

蒼天已死，黄天当立。歳在甲子，天下大吉。

「蒼天すでに死す，黄天まさに立つべし。歳は甲子に在り，天下大吉」とロズさむ信徒たちは、役所などの建物に「甲子」と落書きし、遂に184年に大反乱を起こしたのである。この種の民謡は、いわゆる図讖，または讖緯に類するものであり、「世直し」を予言する意味合いが強い。民謡は正に国家の治乱興亡をはかる晴雨計のようなものだ。

## 二、民謡の現状

岡益巳氏のこの著書は、民謡という視点から中国社会の現状について論じた最初の専門書で、その魅力は、資料作品を取り上げながら、社会的背景を

丁寧に解説してくれるところにある。著者が採録、翻訳した民謡の数は、全部で620点にのぼり、内容から見れば、主に役人非難、世情感嘆という二つの部分に分けられよう。

幕末維新期の日本においても、「落書」（落首）などの時事風刺詩が大いに流行っていた。落書の起源は、時の吉凶を神が人の口を借りて歌わせた童謡にあるとされ、平安時代から始まったものである。庶民が風刺的戯文や詩歌の形式で、政道を批判した匿名の文書を権力者の家の壁に貼りつけたり、わざと道に落としておいてロコミによる流布を狙ったりしたので、「落とし文」と呼ばれた。最も著名な例は、南北朝時代の『建武年間記』に収められた「二条河原落書」である。建武元年（1334）8月、京都の二条河原に立てられたこの落書は、建武新政に対する批判の言葉を連ねている。専制政治が確立した江戸時代になると、「落書のこと、大人は死罪、小人は流罪」という手厳しい法度が、二代将軍秀忠の時代、元和8年（1622）に出された。

言論の自由が保障されている今日、日本人はもはや落書を作る必要がなくなった。しかし、一党支配の中国では、時の権力者に対する民衆の憎しみ、怒りが、「陰口」の形を取らざるを得ない。つまり、権力側の圧力が強い故に、庶民は保身術から表立って意見を述べることに極めて臆病である。にもかかわらず、民衆による非難の矛先は先ず官僚に向けられた。「中央の幹部は組閣で忙しい、省の幹部は外遊で忙しい、県の幹部は官官接待で忙しい、村の幹部は賭事で忙しい」との一節は、官僚の悪行を揶揄している。お正月を迎える農家の扉には、「穀物を取り立て、金を取り立て、命を取り立て。火の用心、泥棒用心、幹部に用心」との対句が貼りつけられているという。物価高騰が続くなか、共産党政府の人気だけが落ち目である。

中国の高度経済成長が日本のマスコミを賑わしている昨今ではあるが、実情はそれほど甘くないようだ。「高層ビルは林立し、乗用車は通りに溢れ、美女は雲の如く集い、工場は倒産する」。表面的な繁栄はこの国の病状の深刻さを隠せない。拝金主義が社会的風潮になり、「十億人民の九億が商売、残り

の一億は開店準備中」の句には、金儲けに走る庶民の姿が皮肉っぽく描かれている。その反面、教育の荒廃ぶりは嘆かわしい。「一番貧乏なのは教授、一番アホなのは博士」が、知識人の自嘲とはいえ、教育・研究者が冷遇されることは、確かである。ちなみに、1992年度国家教育・科学・医療衛生予算800億元弱に対し、全国の公費による飲み食いは1200億元にも達している。他には環境破壊、治安悪化、農業破綻、流民増加、性の商品化などの世相に関する謡が数多く作られ、現状はお寒い限りだ。

現代民謡の中には、内容だけでなく、定型の面においても、古代民謡の伝統を引きずっているものが少くない。例えば、岡氏の著書の147頁に次の謡が取り上げられている。

検査団未来之前驚天動地，  
 来了之後花天酒地，  
 走了之後威信掃地。

この謡の下敷になるものが、元末明初の文人陶宗儀の『輟耕録』の中に出ている。

奉使来时，驚天動地；  
 奉使去時，烏天黑地；  
 官吏都歡天喜地，  
 百姓却啼天哭地。

とにかく、視察にやって来た「お偉いさん」に対する酷評は今も昔も変わらない。世の中に「偽」「悪」「醜」の現象が存在する限り、民衆の反抗心や風刺精神が生き続く。それゆえ、民謡も一朝にして滅びてしまうことはなからう。

### 三、民謡の修辞

「嬉笑怒罵，皆文章を成す」。風刺歌謡が人口に膾炙する理由は、その内容が人々の共感を呼ぶものであることに加え、その豊かな表現力にある。対句、押韻、比喩、諧謔、掛詞などの修辞技法が巧みに用いられ、非常に語呂

が良い。以下、筆者の記憶に留められている四つの作品について、その表現手法及び修辞の技巧を分析してみる。

満州事件以後、「攘外より安内を優先すべきだ」と唱える蒋介石は、日本軍との戦闘を避け続ける一方、共産軍掃討作戦に固執していたが、民衆は

内戦内行，外戦外行。

「内戦に限って玄人，外敵に抵抗するには素人」と詠んで、国民党軍を皮肉る。この民謡では、「内戦一外戦」「内行一外行」という二組の反意語を巧妙に組み合わせるだけで、中国政府、軍隊の「内弁慶」的性格を浮彫りにすることができた。

日中戦争終結後、国民党官僚の腐敗が日増しに甚だしくなり、国民の怒りも、いわゆる「四大家族」に向かって噴出した。

蔣家の槍，陳家の党，  
孔家の錢，宋家の尿。

すなわち、庶民の目から見れば、国を動かし、私腹を肥やす手段として、蒋介石は軍隊を使い、陳立夫・果夫兄弟は党の特務組織を使い、財政部長の孔祥熙は金銭を使い、宋氏三姉妹（長女宋靄齡は孔祥熙夫人，次女宋慶齡は孫文夫人，三女宋美齡は蒋介石夫人）は女の「アソコ」を使う、という有様なのだ。句中に同一の字を用いて口調を整えている上、「四大家族」のそれぞれの「切り札」を一字で示した句末には、画竜点睛の醍醐味が醸し出されている。

「流行り謡」の形式とえば、「数え歌」の形を取るものが多い。筆者の学生時代（80年代初頭）、大学の男子寮では、女子学生の恋心を茶化した謡が流行っていた。

一年級翹，二年級挑，  
三年級跳，四年級没人要。

新入生の時は鼻が高く、男子学生の誘いを無視するくせに、二年生になれば、「いい人がいないかなあ」と秘かに探し始める。三年目に入

ると焦りが出て、卒業の年は、もう売れ残りだ。

この謡は「数え歌」の特徴を生かして、「相場」の変動に揺れる娘心を学年ごとに描いている。しかも、句末が揃って[-iao] 韻を踏んでいるので、覚えやすい。それにしても、結句からは何となく、彼女もいない、もてない男（作者？）の淡々とした哀愁と怨念が漂ってくるような感じがする。

風刺歌謡のパターンの一つとして、数多く作られた「打油詩」は、諧謔を交えて相手をからかうには効果的である。古今東西を問わず、民間文学において僧侶は常に風刺の槍玉に挙げられる。中国民謡にも事欠かない。

春叫猫来猫叫春，聴它越叫越精神。

老僧亦有猫兒意，不敢人前叫一声。

春夜、盛りのついた猫が鳴き続ける。孤独のせいかな、その鳴き声が益々凄まじく聞こえて来る。老僧のわしも猫の欲情と同じなのに、人の前では一声も出せないものだ。

この作品は対比描写の手法を用いて、禁欲生活を強いられる坊主の欲求不満を嘲笑している。まず、動物の自由奔放な生き方との比較を通じて、寺院という社会組織の非人間性を暴露する。更に「人に言えない悩み」と本音を吐かせ、普段、道学者ぶった僧侶の内面の葛藤に鋭く切り込む。詩文の構成として、「起承転結」が首尾よく運んでおり、特に「春夜の寺」という「場の設定」、**「恋猫」**という「引き立て役の仕掛け」は、創作者の腕の見せどころであろう。

「寸鉄，人を殺す」。風刺歌謡は辛辣な俗語を使って世間の不条理を露呈し、人情の機微を穿つことを得意とし、洗練された警句や警句で人の急所を突くところに、薔薇の棘のような趣がある。その反骨精神と滑稽洒脱な趣味が、江戸時代の町人文学にも共通している。この類の言葉遊びには、中国人らしいユーモアを味あえるが、日本語に訳してしまうと、その面白さが判らなくなり、残念でならない。幸いなことに、岡氏の著作では中国語の原作と和訳を併記しているので、中国語が読める方にとっては二重の楽しみだ。



#### 四、民謡の研究

風刺歌謡は伝統的な民間口頭文学の一種である以上、古から文人たちに注目されたことが、『詩経』の編集の経緯を見れば分かるだろう。歴代の歌謡は正史、野史、文集、筆記などに散見されるが、纏まった古代歌謡集として、さしあたり以下の三種類を紹介しておく。宋代の郭茂倩が編集した『樂府詩集』100巻は樂府の代表的な総集で、太古から五代に至るまでの樂府を、郊廟歌辭・燕射歌辭・鼓吹曲辭など十二類に分け、古辭を前に、模擬作を後にして年代順に配列している。解題は広く史料を引いていて精密であり、歌辭の採録も片寄りなく網羅的に行われている。その中の「雜歌謡辭」7巻の謡辭は、すなわち民謡である。明清の時代に入ると、文獻資料から拾い集めるだけでなく、自ら採集した作品を歌謡集に纏める文人も数多く現れてきた。楊慎（1488～1559）の『古今風謡』は、先秦から明嘉靖年間までの歌謡を収録しており、当時の歌謡集の中の白眉と言われている。ただし、作品の出典が示されておらず、不備の譏りを免れまい。清の後期、杜文瀾（1815～1881）の『古謡諺』は名実共に古代歌謡集の集大成である。100巻にも及ぶこの編著は、先秦から明末までの860篇の書籍から、訳3,300点の民謡と諺を収録している。しかも、作品の出典を示している上、原著や関連文献を引用して作品の背景までも詳しく説明している。更に末巻の「集説」は11点の歌謡集、諺語集の概要を紹介し、先学の諸説にも触れている。故に『古謡諺』こそ、中国歌謡研究の入門書及び基本的な資料集と言うべきであろう。

近代中国では、初めて民謡の収集、研究の重要性を唱えたのは、魯迅の実弟周作人（1885—1967）である。1911年5月、周作人は日本から帰国し、故郷たる紹興で教育活動に携わる傍ら、地元の民歌、童歌、民謡の収集を始めた。1917年9月、周作人は北京大学から文科の教授として招かれた。翌年2月、彼は同僚の劉半農、錢玄同、沈尹默、沈兼士らと一緒に、「歌謡募集処」を発足させ、『新青年』及び『北京大学日刊』に「全国近世歌謡募集規定」を公表した。集まってきた歌謡は、5月より『北京大学日刊』に連載された

が、その内容は、民歌、民謡、童歌を始め、隠語、俚諺、諧謔、伝説、神話など、多岐にわたる。周作人こそ、中国における民俗学研究的の草分けと言っても過言ではあるまい。

1920年の冬、北京大学の教員、学生を中心に「歌謡研究会」が誕生し、周作人は主任に選ばれた。更に22年12月17日に、『歌謡週刊』の創刊号が発行され、周作人は編集長を務めた。「発刊の辞」の中で、彼は「国民の心の声を伝える作品集を作りたい」と表明している。柳田国男の民俗学や廃姓外骨の風俗研究に感銘を受けた周作人は、『童謡大観』について『『各省童謡集』に寄せて』など、数多くの論文を著し、外国の民謡や民俗学研究をも精力的に翻訳、紹介した。1925年6月28日、『歌謡週刊』は第97期をもって廃刊となったが、その間、全国の歌謡13,000篇余りを収集し、その内の2226篇を収録した。なお、周作人の教え子で、編集活動に携わった顧頤剛、魏建功、董作賓らは、いずれも後に中国の歴史、思想、文化、風俗研究について、多大な業績を残している。

今日の日本の学界に目を転じれば、現代中国に関する総合研究は、まさに百花繚乱の感を呈している。その中で、「流行り謡」を切り口として、近代化の道に迷走しつつある中国社会の歪みを明らかにしようとする試みが、岡氏の著作の主旨であろう。各種の雑誌、書籍を丹念に追い、民謡の原作を適切に訳した上で、関連情報も存分に盛り込んだ努力に敬意を表したい。要するに、民衆の文化に焦点を当てることによって、現代中国研究に豊かな可能性が開かれることを本書は示している。

#### 参 考 文 献

- 杜文瀾 輯『古謡諺』 中華書局（北京）1958年  
 藤沢由蔵『黄土の声』 華北交通社員会（北京）1942年  
 賈克非 編『中国歴代歌謡精選』 北岳文芸出版社（山西省）1987年  
 柿崎進『中国の民歌』 現代企画室 1974年

- 紀田順一郎『日本人の諷刺精神』 蝸牛社 1980年  
串田久治『天安門落書』 講談社現代新書 1990年  
松本二郎『支那の民謡』 日本堂書店 1925年  
倪墨炎『中国的叛徒与隱士 周作人』 上海文芸出版社（上海）1990年  
岡益巳『現代中国と流行り謡』 御茶の水書房 1995年  
樹建 左愚『当代順口溜与社会熱点掃描』 中国档案出版社（北京）1994年  
鈴木棠三『落首辞典』 東京堂出版 1982年  
矢野隆教『江戸時代落書類聚』上・中・下巻 東京堂出版 1984年  
周作人『自己的園地』 岳麓書社（湖南省）1987年  
周作人『談龍集』 上海書店 1987年  
朱自清『中国歌謠』 作家出版社（北京）1957年